

第13回菊川水系流域委員会での 指摘事項とその対応

令和6年12月18日

国土交通省 中部地方整備局
浜松河川国道事務所

(1) 第13回菊川水系流域委員会 指摘対応表

1

●第13回菊川水系流域委員会 指摘対応表

No.	項目	発言者	意見・指摘事項	回答	対応
1	菊川水系河川整備計画の進捗状況の点検	秋山委員	今年度魚類調査を実施したとのことだが、今回の委員会資料には整理されていないか。	速報値のため、委員会資料には反映できていない。後日、個別に調査結果の情報を共有する。	回答済み
2		渋澤委員	令和元年以降浸水被害が発生しているようであるが、農地への浸水等、それほど大きいわけではないのか。	令和2年～令和4年は内水被害で、流域内で限られた場所での被害となっている。地形特性から黒沢川周辺での内水被害が多い状況である。	回答済み
3		末次委員長	令和4年度末時点から令和7年度末までの5か年加速化対策で、流下能力が7k付近で大きく向上する計画となっているが、残り2年での実施は可能か。掘削の深さや幅はどの程度か。	河川整備計画断面に整備することで、計算上は流下能力の向上が可能と考えている。掘削幅は、堤防防護ラインを残して設定している。縦断形状は、平均河床勾配見合いとし、低水路幅は高水敷等を数m掘削する予定である。	回答済み
4		山田委員 道林委員	令和4年の国安地点でBODの最大値が大きいという説明だったが、他地点でも令和3年～4年は最大値が大きくなっている。年変動として水質の悪い時期があるという説明であったが、近年このような傾向が出始めている印象である。この点について補足説明があれば教えてほしい。	濁水傾向にあった年はBODの最大値が一時的に大きくなる時期があることを確認しているが、例外となる年もあり傾向はまだ把握できていない。現在は冬季の流量減少が要因で一時的にBODが大きくなると推定しているが、引き続き市とも連携し、継続的にモニタリングしていく。	資料3にて説明
5		末次委員長	維持管理計画の見直し検討を進めているとのことだが、当委員会での議論はあるのか。	河川管理課で維持管理計画の更新作業を進めており、現時点では学識者に個別に意見聴取する予定はない。	回答済み
6		末次委員長	施設の老朽化が進む中、従前と異なる管理方法を考えているのか。	従来の事後保全の対応から、予防保全の対応に切り替えて取り組んでいる。	回答済み
7		渋澤委員	河川整備計画の進捗として高潮対策は進んでいるのか。	主な事業は河道掘削である。高潮対策は、現在高潮堤防施工中で、樋管の改築や天端舗装が完成した時点で進捗率が100%になる予定である。	回答済み
8		秋山委員	オオキンケイギクのような外来種植物に対する対策は行っているのか。	外来種の調査は定期的の実施しており、結果に応じて適切に駆除を行っている。	回答済み

(1) 第13回菊川水系流域委員会 指摘対応表

2

●第13回菊川水系流域委員会 指摘対応表

No.	項目	発言者	意見・指摘事項	回答	対応
9	河口フラッシュ調査	末次委員長	過去の調査では河口砂州形状や高さは大きく変化がなかったが、本委員会の資料では、前浜で砂州高が上がっている。この結果が一時的な現象であるか、確認しているか。	令和3年12月から令和4年10月にかけては前浜で0.25m～0.50m程度堆積が進んでいるが、波浪や季節風など一時的な影響だと考えている。将来的には気候変動の影響が考えられるが、現在は河口砂州への影響は出ていないと考えている。	回答済み
10		末次委員長	堆積した土砂は海由来か河川由来か分かりそうか。	今後調査により確認していきたい。過去の導流堤の設計報告書によると、設計当時は海由来が多かったとされている。	調査を継続
11		秋山委員	令和5年調査でワラスボ等の魚類の重要種が確認されたとのことだが、泥干潟も存在しているのか。	令和5年調査によると、干潟の底質の大部分は砂であり、泥質は一部区間において確認されている。	回答済み
12		山田委員	近年、河口部には昔見られたアシ原があまり見られないようである。昔はアシ原が干潟に繁茂していた記憶があるが、現在の干潟は出水時にフラッシュしやすいのか、実態を確認したい。	一定以上の流量で河口砂州のフラッシュが発生すると考えている。なお、アシ原は河口から2km付近で確認されている。	参考資料1にて説明
13		山田委員	魚類調査ではトビハゼが確認されたということで、安定した入江の環境であることが分かる。河口砂州フラッシュのメカニズムが分かれば、コントロールしていくことも考えられる。	引き続き河川整備計画でも環境保全や創出を進めていく。環境調査についても、委員の皆様にご意見を伺いながら進めていきたい。	回答済み
14		末次委員長	ピーク流量の関係をみると、計画高水流量の5割程度である、750m ³ /sを超えると流量増加に従いフラッシュによる開口幅が大きくなっている状況がみてとれる。また、御前崎の潮位が高くて、流量が1000 m ³ /sを超過すればフラッシュされるような傾向がみてとれる。	河口砂州のフラッシュを考慮すると、計画上の掘削量を減らすことができる可能性がある。全国的にもそのような計画を策定している事例もあるため、次期河川整備計画ではそのような観点もいれたい。	回答済み